

# 人間関係論（その1） 親子関係について

## 1 家庭内暴力児の親子関係に関する考察

山 田 順 子

### The Study of Human Relations — No. 1 — —Relationship between the Parents and Children of Young People Using Violence toward Only Their Own Family—

Yoriko YAMADA

I have been studying the cases regarding the problem of violence in the family for three years. The main purpose of the study is to examine the problem of the young people who use violence toward only their own family. In the process of the study, I am convinced that this problem should not be undervalued in the field of human relations. Therefore, in this thesis, the problem of young people using violence toward only their family is analyzed on a part of the broad issues of relationship between parents and children. The main focus of the study is made in the problems of personality of their mothers' lack receptivity which is indispensable to the process of mental independence of children, their fathers' status without authority over their families, a lot of disadvantages for parents and children resulted from the indistinct rebellious age of children, and the issue from a viewpoint of acquirement of role.

#### 〔動機及び目的〕

昭和52年10月のいわゆる「開成高校生事件」以来、「家庭内暴力」という言葉がマスコミなどにしばしば登場するようになった。興味をひかれて調べてみたところ、学会やマスコミなどで「家庭内暴力」という語が使用された場合、これは「家庭外ではごく普通の児童・青年が家庭内のみで暴力をふるうという現象」をさしていると考えてまず間違いないということがわかった。

このような児童・青年の63ケースについて問題が発生するメカニズムを探究してゆく中で、一般的な人間関係について論じる場合にも、特にその基盤である親子関係について考える際に、この問題を避けて通るべきではないし、またこの問題を非常に特殊なケースとして片付けてしまうことはできない、ということを感じて痛切に感じるようになった。

そこで、人間関係というものを考える際にまずその基盤となる親子関係から論じること

にし、初回である今回は特に家庭内暴力児の親子関係について考察し、その問題点を明確にしてみたいと思う。

### 〔方法〕

警視庁少年第一課において「家庭内暴力」として分類されているケースのうち、昭和51年から53年にかけての68ケースの調書を基礎資料とし、担当者との面接および書面による問合わせによりさらに詳細な情報の収集をはかった上で、本論文における「家庭内暴力児」の定義からはずれる5ケースを除いた63ケースの検討、分析に基いて論をすすめた。

### 〔用語と定義〕<sup>(注1)</sup>

今日、学会やマスコミなどでは「家庭内暴力」という語が「家庭外ではごく普通の児童青年が家庭内のみで暴力をふるうという現象」をさすものとして使用されているが、この用法は当面はさしつかえなくとも、将来混乱を招くことが予想される。例えば、家庭内のみならず家庭外でも暴力をふるう児童・青年や、中年に至って挫折を知り家庭内のみで暴力をふるうエリート社員の問題行動について論ずる場合など。

そこで、「外ではごく普通であるが、家庭内のみで暴力をふるう児童・青年」を「家庭内暴力児」と呼ぶことを提案したい。彼らは年齢的には児童期あるいは青年期にあっても、精神的発達段階は未だに幼児期にある部分が少なくないので、その意味をこめてこう呼ぼうと思う。

そして、本論文では次のように定義する。「家庭内暴力児とは、家庭内で家族を対象に肉体的・言語的暴力をふるう児童・青年をさす。家族以外の者に対しては常識的な態度をとるのが特徴である。」

### 〔結果及び考察〕<sup>(注2)</sup>

家庭内暴力児の特徴として第一にあげられ

るのは、家庭内のみで、主に母親を対象に暴力をふるうという点である。暴力をふるうということから自我形成の過程において障害を生じているものと考えられ、また母親が対象であるという点から特に母親との関係に問題があるのではないかと考えられる。

そこで、まず家庭内暴力児と母親の関係から見てゆきたい。

## 第1章 家庭内暴力児と母親

### 第1節 母親の性格・子どもの性格

家庭内暴力児の母親には、子どもの立場に立って子どもの気持を理解しようとせず、しかも口うるさいものが多い。

性格的には自己中心的であり、共感性や洞察力に欠け、きまじめでユーモアの感覚にも乏しい者が多い。

また、母親としてだけでなく、人間としてもかなり未熟なのではないと思われるケースも多い。たとえば、些細なことでかっとなって中学3年生の息子の髪をつかんで殴ったり、中学2年生の息子と取っ組み合いの喧嘩をしたり、子どもが読んでいた本を取り上げていきなり破り捨てたりという具合である。子どもからとても家にいられないようなひどい暴力をふるわれるのは、このような母親である場合が多い。

このような母親に育てられた子どもの中には、無意識のうちにも母親をモデルとして母親の持つ欠点を身につけてしまうものもある。自己中心的で共感性や洞察力に欠け、きまじめでユーモアの感覚がないというのは、家庭内暴力児に共通する性格でもある。このような性格の子どもの中には、少しでも自我が脅威にさらされるとひどく動揺・混乱し、家族の気持や立場を思いやることなくそれを暴力という形で家族にぶつけてしまうという行動に出る者もいる。そして、そのような行動様式が他の諸要因と相まって家庭内暴力児となる場合があると考えられる。

## 第2節 母親の2つのタイプ

家庭内暴力児の母親は、大きく2つのタイプに分けられる。

1つは、子どもとの情緒的結合が強いタイプである。この母親には感情的になりやすい性格の者が多く、子どもに対してかなり口うるさく干渉しまた支配しようとする。だが、子どもの心理には鈍感で、子どもの立場に立って子どもを理解しようとはしない。

もう1つは、子どもとの情緒的結合が弱いタイプである。この母親には、比較的理性的な性格であるが子どもはあまり好きではない、という者が多い。このような母親は、頭をなでてゆったり抱きしめてゆったりというような子どもとの身体的接触をほとんどしない。

現在までの調査では、前者のタイプの母親のケースが圧倒的に多い。63ケースについて調べてみると、61ケースの母親が前者のタイプであり、後者のタイプは2ケースである。

だが、女性の高学歴化の傾向その他を考えると、後者のタイプの母親の問題も今後増加してくるのではないかと予想される。

どちらのタイプの母親の場合にも、子どもは心理的に安定せず、様々な困難や障害を乗り越えて成長してゆくための安定した精神的基盤が脆弱である。

それゆえ、ちょっとした障害に出会ってもすぐ挫折感を抱き、建設的な方策を考えようとせず、中には家族に暴力をふるうという形で自分の苦しみをぶつける者も出てくる。家庭内暴力児とは、このような行動様式が他の諸要因と相まって一種の習慣化したものと見られることもできる。

## 第3節 依存と自立

自分の苦悩を暴力という形で親にぶつける家庭内暴力児の行動には、親への依存性の強さがあらわれているとも言えるだろう。別の言い方をすれば、家庭内暴力児には年齢相応の自立性が育っていないのではないかというこ

とである。

では、なぜ家庭内暴力児は親への依存性が強く、自立性が育っていないのだろうか。まず、依存と自立の関係から見てゆこう。

### (1) 子どもの依存と自立

ヒトは、高等哺乳類でありながら、他の哺乳動物とは違って、ほとんど無能な状態で生まれて来る。それゆえ、生命維持の為に、親という養育者が絶対に必要なのである。

そして、乳幼児期には、母と子は相互交渉過程を通して強い情緒的結合関係を成立させる。

子どもがこの強い情緒的結合関係を結んだ母親からどのように分離し自立してゆくのかについては諸説があるが、それらに共通していることは、母親が子どもを充分に受容してやることで、子どもが分離・自立という課題に取り組むための必要条件である、ということである。

母親が子どもを受容してやることと子どもの自立性を育てることとの間には、よく誤解されているような負の相関関係はなく、両者は両極概念ではないのである。

高橋恵子(1969)は、依存対象の増加・拡大などによる依存性の発達の変容の過程が、依存から自立への発達過程に他ならず、発達に見合った仕方では依存行動が現われるようになることが自立的になってゆくことに他ならない、と捉えている。<sup>(注3)</sup>

人間は社会的動物であり、誰にも全く依存しないで生きてゆくのは不可能であるということを考えても、依存要求の充足が自立の基盤であり、依存性の発達の変容こそ自立への道であるという捉え方は適切であろう。

### (2) 家庭内暴力児の依存と自立

子どもとの情緒的結合の強さという観点から見た家庭内暴力児の母親の2つのタイプについてはすでに述べたが、それを子どもの受

容・自立という観点から考えてみよう。

まず、子どもとの情緒的結合が強い母親について見ると、子どもの心理に鈍感で子どもの立場に立って子どもを理解しようとしないうために、子どもが黙って見守ってほしいような場面で干渉し、手をさしのべてほしいような場面で突き放してしまう。それゆえ、子どもは、いつでも親に受容してもらえという安心感、安定感が持てない。そのため、安心して徐々に着実に親からの自立をはかるということができず、いつまでも依存状態から抜け切れないのである。

次に、子どもとの情緒的結合が弱い母親について考えてみよう。この母親は子どもというものがあまり好きではないので、感情的レベルで子どもを受容してやることが少ない。頭をなでてやったり抱きしめてやったりというような子どもとの身体的接触をほとんどしないということにも、それがあらわれている。このため、子どもは心の底に母親の愛情に対する飢餓感を持つ。このような子どもには自立の基盤となる心理的基地ともいうべきものがないうえ、真の自立性が育たない。

どちらのタイプの場合にも、子どもが自立をはかるに際して安定した精神的基盤を持てるように受容してやる、という面が欠けているのである。

自立性が未熟であるということは、困難や障害にあっても独力でそれに対処し乗り越えてゆくことができない、ということである。そのような者は、ちょっとした困難や障害に出会っても動揺・混乱し、すぐに挫折感を抱きやすい。そして、中には、他の諸要因と相まって、このような挫折感による苦しみを、家族に暴力をふるうという形でぶつける者も出てくるのであり、そのような行動様式が一種の習慣化したものが家庭内暴力児であるとも考えられる。

以上に、家庭内暴力児と母親について見てきたが、子どもの自我形成には父親の存在も

重要であることは言うまでもない。

そこで、次に、家庭内暴力児と父親について見てゆこう。

## 第2章 家庭内暴力児と父親

家庭内暴力児の父親について見ると、社会的地位や経済的能力などには問題ないが、家庭内におけるリーダーシップのとり方が下手で、また父親としての存在感が希薄な人が多い。そして、日頃から妻や子どもに対して受容的でなく、家庭において相手の立場になって物事を考え、理解し、援助するということはほとんどない。また、大事な場面で冷静に判断し、決断を下して家族をまとめ引っばってゆくということもない。

また、子どもの暴力が始まるといつの間にかその場からいなくなってしまうたり、いてもただその場の暴力をやめさせようとするだけの父親が多い。

そして、子どもが家庭内暴力児となったことについては、「お前の育て方が悪いからだ。」と言って母親を責めるのみで、母親と力を合わせて問題に取り組もうとする父親は少ない。

63ケースについて調べた限りでは、そのような父親は1ケースもなかった。

つまり、家庭内暴力児の父親は、子どもにとって男性としてのモデルたりえず、また尊敬の対象でもなく、子どもがその人格形成の過程で成長のために乗り越える壁としての役割を果たさない者が多い。

このような父親の存在は、子どもの自立性や耐性、視野の拡大、適確な判断力、決断力、行動力などの取得にとってマイナスとなる場合が多い。そして、自立性や耐性に乏しく視野も狭いという精神構造が、家庭内暴力児の発症を導く要因の一つになると思うのである。

以上に、家庭内暴力児と両親の関係について見てきた。この背景には、産業構造の変化にともなう家族構成及び家族関係の変容、そして父親や母親の役割の変容などがあること

は言うまでもないが、枚数の都合もあるのでこの問題については次の機会に論じたい。

### 第3章 第一反抗期と中間反抗期

#### 第1節 家庭内暴力児と反抗期

家庭内暴力児には、順調な成長・発達過程をたどっていれば通常3歳前後に見られる第一反抗期や7歳前後に見られる口答えの盛んな中間反抗期を経験していないものが大部分である。筆者が調査した63ケースでは、全ケースが第一反抗期や中間反抗期が顕著でないものだった。

第一反抗期や中間反抗期というのは、自我の芽ばえによる自主・独立の欲求のあらわれである。特に、第一反抗期は母と子の分離の始まりでもあり、自主性を獲得するための大切な契機でもある。これらの時期の言動は多分に衝動的であり、こどもはこの時期の様々な経験から次第に自分の衝動をコントロールするということを学ぶのである。

したがって、第一反抗期や中間反抗期を経験していないということは、自らの衝動を現実合うようにコントロールするという面や自主性・自立性の発達という面において未熟なところがあるということの意味すると考えてよいだろう。家庭内暴力児の行動が、少しでも気に入らないことがあると親をたたいたり物を投げたりする第一反抗期の行動や何かにつけてすぐ口答えする中間反抗期の言動によく以ているというのは、大変示唆的である。

家庭内暴力児の発症が集中している中学から高校にかけての時期（63ケース中56ケースがこの時期に発症）は、第二反抗期を迎える時期でもある。第二反抗期というのは、親をはじめとする身近な人に対して反抗するのみならず、その背景にある社会制度・慣習・権威、伝統などに対して強く反発し反抗する時期である。そして、この時期を経験することにより、真に独立した人格になる為の社会的な要請でもある自我の確立や社会性の獲得

という課題が解決できるようになるのである。

つまり、家庭内暴力児は、本来なら第一反抗期や中間反抗期を経験することによって解決されているはずの発達課題も未解決のまま、自我の確立や社会性の獲得などの課題をも背負うことになるわけである。

家庭内暴力児は自らの衝動を現実に合わせてコントロールするという面においてすら未熟なので、肉体的成熟にともなって急激に亢進してきた衝動性がうまくコントロールできない。しかも、自主性・自立性が育っておらず親への甘えや依存から抜け出せないためにそれが自立への欲求と葛藤を引き起こし、自己概念は混乱し情緒は著しく不安定になるのである。

#### 第2節 反抗期と親

第一反抗期や中間反抗期が顕著でないということは、子どもにばかりでなく親にとってもマイナス面が大きいということを忘れてはならないだろう。

親は、子どもの第一反抗期や中間反抗期を経験することにより、子どもに一方的な命令や指示を与えたりむやみに抑圧してはいけないのだということに気づき、同時に子どもの反抗に対してどのように対応すべきかを学ぶのである。ところが、子どもの第一反抗期や中間反抗期を経験していない親は、子どもの反抗にどのように対処したらよいかがよくわからないのである。

家庭内暴力児は、暴力をふるうという行動を通してはじめて親に対してはっきりした形で一種の問題提起をしているとも考えられる。それゆえ、親もそれに対して真剣に答えてやるべきなのだが、家庭内暴力児の父親には正面から問題と取り組もうとする人はまれであり、筆者が調査した63ケースについて言えばそのような父親は1ケースもなかった。また、母親について見ると、子どもの暴力に振り回され、子どもが暴力という行動を通して訴え

ようとしているものを汲み取るような精神的余裕のない者が多いのである。

家庭内暴力児にしてみれば、自らの抑え難い感情の嵐にとまどっているのに、両親は周章狼狽するばかりで自分の訴えや苦しみに対して鈍感であり真剣に受け止めてくれないと感じる。そして、自己同一性喪失の危機感に加え、両親の対応に対する失望といらだちから暴力をふるわずにはいられないという悪循環に陥るのである。

### 第3節 言語による感情表出

家庭内暴力児には、第一反抗期のみならずいわゆる「口答えの時期」と言われる中間反抗期をも経験していないものが多く、親も子も互いに言葉で渡り合うという経験が少ない。その上、家庭内暴力児の親には子どもの言いに耳を貸そうとしなかったり、独断や偏見で一方向的に抑えつけるものが多い。このような経験を繰り返すことにより、子どもは親に対する言語による訴えや感情表出は効果がないということを経験するのである。その結果、子どもは、親に対して自分の気持ちを言語で表現し訴えるということをしなくなり、しかも経験を積まないため言語による感情表出が不得手になる。

その上、家庭内暴力児は自立性という面においても未熟で親への依存性が強いので、困難に出会ってもその苦しみを親にぶつけたりせず自力で乗り越えてゆこうとしないのである。

そのため、困難や危機に陥ると、自分の苦悩や焦躁を言葉によってではなく暴力という形で表現して親にぶつけるとも考えられる。

☆ ☆ ☆

家庭内暴力児には第一反抗期や中間反抗期がないばかりでなく、それ以後の時期においても家庭や学校で「よい子」という評価を受けていたものが多い。「よい子」とは、家庭や

学校においては素直で従順であり、学業成績にも問題がなく、また近隣の人には礼儀正しい態度をとるということの意味している。

63ケースについて見てみると、発症の直前まで周囲から「よい子」と評価されていたものの45ケース、発症の1年前まで「よい子」と評価されていたものの6ケースある。また、発症の前1年間の学業成績について見ると、中位以上のものが57ケースとなっている。<sup>(注4)</sup>

「よい子」という評価を受けたいと思えば誰でも「よい子」になれるというものではない。「よい子」という評価を得ていたという事実は、家庭内暴力児自身の素質的要因に負うところも少なくないであろう。

次に、家庭内暴力児の人格形成の過程を、親をはじめとする周囲から受ける期待とその実現という観点から見てゆこう。

## 第4章 役割取得という観点から見た家庭内暴力児

### 第1節 役割理論から見た人格形成過程

子どもが時間的にも心理的にも最も緊密に接触する最初の人、母親である。幼児は母親と自分の行動との相互作用を通して、母親の内的な斉一性を持った反応を予測しながら、自分に対する母親の期待を認知するのである。

そして、幼児は自分が母親の期待に沿うように行動すれば賞賛され、それに反する行動をとれば叱責されるということを経験してゆく中で、自分の欲求をコントロールしながら行動することを少しずつ覚えてゆく。これが自分に期待されている役割というものを知覚・認知し、その役割を取得してゆく過程である。この過程は決して子どもが一方向的な受身となつて進行するものではなく、母親との間の相互規定的・力動的なものであることはいうまでもない。

この過程は、母親との関係の次の段階として父親や兄弟などの、家族の人々との関係に、

そして仲間集団との関係に拡大されてゆく。

また、他者の反応からだけでなく自分が置かれた状況を知覚する中で、場面に応じた適切な行動が何であるかを知るようになるのである。

そして、これらの過程において受ける期待の程度や内容が、子どもの価値観や生き方まで左右するようになることも少なくない。

## 第2節 役割取得における能力と個人差

役割取得の過程には個人差がある。その差は何によるものだろうか。筆者は、最終的にはそれを、①知能、②感受性 ③役割取得の意志、によるものと考えたい。

役割取得の過程は、一つには他者の立場に立って感じ考える能力や、自分の置かれた状況をすみやかにかつ正確に知覚し、その場面に応じた適切な行動を推察する能力に左右されるが、これらの能力の基礎にあるのは知能と感受性である。

そして、自分に期待されている役割を知覚・認知できるということの次に問題になってくるのは、それに応え得る能力を備えているかどうかということ、そしてその役割をとろうとする意志があるかどうかということである。

①期待されている役割を知覚・認知できる。

②その役割をとれる能力がある。

③その役割をとろうとする意志がある。

この3つの条件がそろってはじめて自分に期待されている役割行動がとれるのである。そして、これは自己概念の形成過程でもある。

そして、期待されていた役割行動をとったかどうかということが、次に受ける期待の内容に大きくかわってくるのである。

子どもがいつも期待された役割行動をとるわけではないという場合には、周囲もそれなりの対応をするようになり、子ども自身もその中で自分の能力に合った生き方や自分なりの価値観を見つけてゆくことができる。ところが、周囲、とりわけ親が、「よい子」であ

ることを強く期待し、また子どもが周囲の期待を敏感に察知できるのみでなく、それに応え得る能力や応えようとする意志を持っていると、親をはじめとする周囲からの賞賛によって強化され、「よい子」であり続けることを余儀なくされてしまいがちである。

## 第3節 役割取得という観点から見た家庭内暴力児

家庭内暴力児には学業成績の良い者が多く、少なくとも学業成績に関する限り、ある段階までは期待に応え得る能力や応えようという意志を持っていた子どもであるといえよう。もちろん、親の期待が大きかったことは言うまでもない。

学業成績の良し悪しは勉強にあてる時間の多少に左右されることも多いから、必ずしも「勉強ができること」イコール「頭がいいこと」とは言えない。しかし、家庭内暴力児を扱っている精神科医やカウンセラーによると、家庭内暴力児には、「頭のいい子」「感受性の鋭い子」が多いという。つまり、家庭内暴力児となった子どもは、親をはじめとする周囲の価値感や期待を敏感に察知できるのみならず、それに応え得る能力も少なくともある時点までは持っていたといえよう。

ところが、期待に応えたいという意志があるにもかかわらず、ある時点から受けている期待と自分の能力・自分の気持との間にずれができ、期待に充分に応えられなくなる。そして周囲の期待やその中ではぐくまれてきた自分の価値観があまりに狭く、かつ堅いため、自分の現在の力に合うようにそれらを調整するという他律的価値感から自律的価値観への転換がスムーズにできず、非常に苦しいことになる。そして、自己の破滅に対する無意識の自己防衛から、今度は自分に与えられていた役割そのものと、その役割を自分に課してきた人間とを批難せずにはいられなくなる。こうして強い他罰的傾向を持つようになる。

り、それまで自分にとって負担の大きい役割を課してきた母親などに対する肉体的・言語的暴力などが始まる。その間、家庭内暴力児の自己概念は極度の混乱に陥り、家庭内暴力児自身も煩悶していることは言うまでもない。

だが、頭がよくて感受性の鋭い子がみな家庭内暴力児になっているかという決してそうではない。何より、狭隘な価値観による過大な負担を子どもに負わせ、かつ著しく柔軟性を欠く理想像を押しつけようとした親の誤った養育態度を指摘しないわけにはゆかない。

そして、ここでもう一つ指摘しておきたいのは、家庭内暴力児の親子をめぐる人間関係の、特に質的な貧しさである。

本章の第2 節に

- ①期待されている役割を知覚・認知できる。
- ②その役割をとれる能力がある。
- ③その役割をとろうとする意志がある。

という三つの条件がそろって初めて自分に期待されている役割行動をとることができること、そしてこれは自己概念の形成過程でもあること、を述べた。

だが、ここで付け加えておかねばならないのは、健全な自己概念の形成がおこなわれるためには、自分に期待され与えられようとしている役割そのものを、ある程度客観的に吟味・検討することが不可欠であるということである。このようなある程度の客観性を有する吟味・検討は、自らが質的に多様な人間関係を結び、その中に身を置くことによって初めて可能になるものであると思う。

ところが、家庭内暴力児は、質的に多様な人間関係を持っていないのである。そのため、暴力をふるい出すようになるまでの家庭内暴力児は、親から与えられた価値観やそれにとりまとう役割を敏感に察知し、それに応えるだけで、それらを客観的な視野に立って検討するということをしてこなかったのである。

この人間関係の質的な貧しさは、家庭内暴力児の母親についても言えることである。家

庭内暴力児の母親は、多様な人間関係を有していないために、子どもの気持を察するという感性に欠けるのである。つまり、自分の期待や課している役割が子どもにどれほど大きな負担を与えているかということや、そのほかにも自分の日頃の養育態度における不適切な面などがわからないのである。

立ち直った家庭内暴力児のケースを見ると、質的に多様な人間関係の中に身を置くことにより、自分が親から与えられていた価値観のみならず、自分と親との関係についても客観的に捉えなおす余裕さえ出てくるようになり、その中で立ち直るきっかけをつかんだというものが少なくない。

また、立ち直ったケースの母親について見ると、子どもの暴力から逃れる意味もあってサークル活動などに参加するようになったところ、人間関係が広がって気持ちも明るくなり、それまでの自分の価値観や視野の狭さや適切でなかった養育態度を反省する余裕さえ生まれ、その頃から子どもの暴力もおさまってきたというものも少なくない。

これらのケースを見ても、現代社会においては、健全な自己概念の形成や役割取得のためにかなり意識的に人間関係を広げ、しかもそれを質的に多様なものにする努力をしていく必要があるように思うのである。

☆ ☆ ☆

以上に、家庭内暴力児の親子関係の問題点について述べてきた。もちろん、家庭内暴力児の出現の要因が親子関係のみにあるわけではないことは、言うまでもない。

人間形成にかかわる要因は、大きくわけて3つある。社会環境的要因、家庭環境的要因、個体的要因（個人が生得的に有する資質など）がそれである。そして、これらの要因が相互に関係し合っ人格が形成されてゆくわけであり、家庭内暴力児もその例外ではな



い。我々は、家庭内暴力児の出現の背景にある学歴偏重社会の趨勢、産業構造の変化にともなう家族構成及び家族関係の変容、そして父親と母親の役割の変容などの社会環境的要因や家庭環境的要因を無視することはできない。

だが、同じ時代にあって、両親が揃い、経済的にも不自由はなく、他にも特に問題はないように見える家庭に育った子ども達の中にも、家庭内暴力児になる子もいれば一応健全に育ってゆく子もいる。その違いはいったいどこから来るのだろうかということを見てゆくと、やはり親子関係の問題が大きな比重を占めていると考えざるを得ないケースがほとんどである。家庭内暴力児というのは、人生のある一時期において、それまでの親子関係の歪みが一挙に露呈したものとも考えられる。

☆ ☆ ☆

家庭内暴力児の研究を始めてから3年近くになるが、最近では、中学生や高校生の家庭内暴力児にはまだ救いがあると思うようになった。彼らは、周囲の対応がよほど不適切でない限り、早晚立ち直ってゆくからである。それに比べて、社会に出て中年になってからはじめて挫折を知って家族に暴力をふるうようになったエリートなどの場合には、問題はより一層深刻である。何の罪もない子どもにまで悪影響を与えることになり、本人の苦しみもさることながら、家族の受ける傷の深さも測り知れないものとなる。そして、このようなケースにおいても、問題の根底あるのは、当人の幼児期・児童期・青年期を通しての親子関係の歪みである場合が少なくないのである。

家庭内暴力児の暴力は、子どもの親に対する復讐であるともいわれるが、彼らの場合にはすでに親はないケースや親とは別に住んで

いるケースがほとんどで、いわれなき暴力をふるわれて少なからぬ被害を受けるのは何の罪もない妻や子どもであるというのは、悲劇以外のなにものでもない。そしてまた、このような親を持つ子ども達がいずれは子を持つ親になる日が来ることを思うと、暗澹たる気持にならざるを得ない。

家庭内暴力児の親、特に母親の中には、その両親との親子関係にすでに何らかの歪みのあった者が少なくないのである。歪んだ親子関係は、その子ばかりか孫にまで悪影響を及ぼす場合も多いことを考えると、人間関係の基盤をなす親子関係というものの重要性を改めて痛感せずにはいられない。

注

- (1) 詳しくは 山田順子：「家庭内暴力」と「家庭内暴力児」—用法への提言—、教育心理、Vol.27, No.10, 1979.
- (2) 詳しくは 山田順子：家庭内暴力児の発生のメカニズムに関する研究、筑波大学大学院 教育研究科 修士論文抄録集、1979.
- (3) 高橋恵子：子どもの社会化過程と依存性、桂広介（編）、児童心理学講座8 人格の発達、金子書房、1969.
- (4) 詳しくは 山田順子：家庭内暴力児の発生のメカニズムに関する研究、筑波大学大学院 教育研究科 修士論文抄録集、1979.

(1980年9月22日受付)